

# Virginia Woolf のパーティ意識について

水 浪 純

〔抄 録〕

Virginia Woolf (1882-1941)の作品は、小説、伝記、評論などから成っているが、そのうち小説は11冊を数える。これらの小説群に関しては、作者の注意は常に人間の内面的なもの、とくに生と死、その限りある時間、そして人間の孤独に向けられているのが大きな特徴といえるだろう。人と人とは深淵によって隔てられており、人間は「氷山のように孤独な存在」であると書いた処女作 *The Voyage Out* 以来、「孤独」は Woolf の小説のテーマであり続けたのだった。そうした観点から見ると、今回のテーマ「パーティ意識」は、一見奇異な感を受けるものであろう。だが、Woolf は自らの日記において「パーティ意識」という言葉を残している。しかし彼女はそのことに関して何ら言及はしていないのである。ただ彼女の小説において、パーティという場面設定はかなりの数を占めている。Woolf にとって、一体「パーティ」とはどのような意味を持っていたのか。 *Mrs Dalloway*、*The Waves*、*To the Light house*、*The Years*、などの作品を通し、Virginia Woolf のパーティ意識を考察する。

**キーワード** ヴァージニア・ウルフ、パーティ意識、パーティ、孤独、社交

## 1 はじめに

Virginia Woolf は1915年最初の小説 *The Voyage Out* を出版、その後 *Night and Day*、*Jacob's Room*、*Mrs Dalloway*、*To the Lighthouse*、*Orlando*、そして *The Waves* と作品を発表し続けるが、こうした彼女の一連の小説の中に、いわゆる社交上の人々の集まり——すなわちパーティ——というものが数多く登場する。また Woolf は自分の日記に「パーティ意識」 party consciousness という言葉を残している。しかし、このことに関して Woolf は深くは言及していない。従って彼女の意図したパーティ意識を知ることは難しいようだ。Woolf のいうパーティ意識とは一体どういうものであったのか、いくつかの作品を通し、彼女がこの言葉によって意図したものを考察したい。

## 2 若い日の Woolf とパーティ

まずパーティ意識を考えていく上で、若い日の Woolf がパーティに対してどのような思いを持っていたのかを見てみたい。 *The Waves* の登場人物の一人である Rhoda は Woolf の分身とも呼べるほどに Woolf に似た性格を持っているのだが、この Rhoda はまるでパーティ恐怖症とでも呼べそうなほどにパーティを嫌悪し怖れていた。

作品 *The Waves* には Bernard、Neville、Louis、という 3 人の男性、Rhoda、Jinny、Susan という 3 人の女性が登場する。Woolf はこの 6 人に自分自身を投影したといわれるが、その中でも Rhoda の幼少時と Woolf の少女時代が酷似していることは誰しも認めるところである。6 人の登場人物は成長し、Bernard と Neville はケンブリッジへ、Louis は実社会へ、Susan はふるさとの農場へ、そして Rhoda と Jinny の二人は社交界へデビューする。Jinny は水を得た魚のように社交界に馴染み、そこに自分の生きる場を見つけるが、一方、Rhoda はそうした場に馴染むことが出来ない。人々の視線が百万の矢となって自分を狙うのを感じてしまう。I hate all details of the individual life. But I am fixed here to listen. An immense pressure is on me. I cannot move without dislodging the weight of centuries. A million arrows pierce on me. Scorn and ridicule pierce me. I, who could beat my breast against the storm and let the hail choke me joyfully, am pinned down here; am exposed. The tiger leaps.<sup>(1)</sup> Rhoda はこうした人々の視線を虎が飛びかかると表現するのである。

Woolf の甥であり美術評論家であった Quentin Bell の書いた『ヴァージニア・ウルフ伝』の中で描かれる社交界デビュー当時の Virginia Woolf は、この Rhoda と重なって見えて来る。Woolf は姉の Vanessa とともに上流社会のパーティにつれて行かれるのだが、Rhoda と同じくふたりともこの社交界というものに順応出来ない。この辺りは Woolf の『存在の瞬間』の中の「過去のスケッチ」に詳しい。Virginia と Vanessa の義理の兄弟 (母の連れ子) である George Duckworth は、Woolf にいわせると George accepted Victorian society so implicitly that to an archaeologist he would be a fascinating object. Like a fossil he had taken every crease and wrinkle of the conventions of upper middle class society between 1870 and 1900.<sup>(2)</sup> と皮肉をもって書いているように、ひたすら上流社会のあらゆる慣習を守り、妹たちを社交界にデビューさせ、よき伴侶を見つけさせようとした。しかし Woolf は I could not dance. The humiliation of standing unpartnered returns to me.<sup>(3)</sup> と、そのときの屈辱的な思いを書いている。しかし Woolf はこうした思いを述べた後で次のようにも書いている。But at the same time I recall that the good friend who is with me still, upheld me; that the sense of the spectacle; ...that I am seeing what will be useful later. I could even find the words for the scene as I stood there. At the same time, there was the thrill; and the oddity.<sup>(4)</sup>

パーティでの屈辱的な思いは生涯 Woolf の中に残っていたようである。しかし、先ほどの「過去のスケッチ」の文章の後半に見られるように、彼女の中にパーティに対する肯定的な思いがあったことも事実である。彼女の観察眼はパーティでの様々のシーンをとらえる。「過去のスケッチ」の中で彼女はまた次のように書いている。For the first time one was in touch with a young man in white waistcoat and gloves; and I too was in white and gloves. If it was unreal, there was a thrill in that reality.<sup>(5)</sup>そして興奮の中で帰宅すると自分の部屋が小さく汚く見え、次の朝、ソフォクレスを読みながらもまだパーティのことを考えていた、等と書きしるし、パーティが Woolf にかかなりのインパクトを与え、彼女が次第にその魅力にとらえられていった様子が推察される。Quentin Bell もまたその辺りを『ヴァージニア・ウルフ伝』に次のように書いている。「上流社会には彼女がいやと思い、恐ろしいと思うものが多くあった。しかし、いつも何か彼女の愛するものがそこにあった。事物の中心にいること、大きな権力を支配し、上品な物腰やさまざまな特権を当然のものとするところの出来る人々を知ること、飾るにふさわしく、また実際飾られた世界の人々と交際すること、執事がシェイクスピアの生きていた頃からの古い名前を知らせるのを聞くこと、こういうことに彼女は全く無関心になることは決してできなかった。彼女は実際空想的な貴族崇拜者であった<sup>(6)</sup>」と。Woolf は怖れ、嫌悪しつつもパーティに魅力を感じていったのだった。一方では義兄である George Duckworth が強力に押し出してくるヴィクトリア朝式有能な機構と彼女の呼ぶところの社交界への反撥があり、彼女の中にはパーティに対するアンビヴァレントな思いが育っていったようだ。

Woolf は13歳で母を亡くし、15歳で母の代わりをつとめていた義姉 Stella を失う。人間形成の上で重要なこの時期でのこうした経験は、過敏で傷つきやすい Woolf にどれほどの影響を与えたかは想像に難くない。彼女はその後の7年間に兄 Thoby の死、父 Leslie Stephen の死を体験する。Woolf の作品においては、「死」そして「孤独」は重要なテーマであった。彼女の思春期が情緒的に不安定なものであったこと、また The Waves における内面的・内向的な Rhoda が Woolf そのものであることは確かなようであり、また孤独をテーマとした *The Voyage Out* は、若い日の Woolf の心の裏を微妙な動きまで書き込んでおり、この作品はほぼ自伝的なものと見てよいとも言われている<sup>(7)</sup>。しかし、先に述べたように、Woolf の中には不思議なことに孤独と社交性が同居していたのだった。パーティというものを嫌悪しつつ、片方の眼ではしっかりと好奇心を持ってパーティを、そして人を観察し続けていたのである。

始めに述べたように Woolf は日記の中に、But my present reflection is that people have any number of states of consciousness: and I should like to investigate the party consciousness, the frock consciousness etc.<sup>(8)</sup>と書いており、人間の意識の一つとしてパーティ意識と呼ぶものをあげている。Woolf は自分の中にこうした意識が存在するを感じ、これに注目したのであった。

### 3 Mrs Dalloway を通して

この Woolf のパーティ意識を前面に出したのが、1925年出版された *Mrs Dalloway* ではないだろうか。*Mrs Dalloway* は第一次大戦終了後5年たったイギリスのロンドンを舞台として、国会議員の妻 Clarissa Dalloway の一日を描いた作品である。国会議事堂の大時計ビッグ・ベンが時を告げ続ける中、51歳になる Clarissa が自宅で催すパーティのために花を買いに6月の陽光の中、ロンドンの町に足を踏み出すところからこの小説は始まっていく。病み上がりの Clarissa にとってパーティの準備は大変な負担であるのだが、彼女はパーティに固執する。夫の Richard は自分の健康を案じて、また昔の恋人である Peter は自分のスノブさを笑い、自分のパーティへの熱意を批判するだろう。しかし、と Clarissa は言う。自分は「人生」のためにパーティを開くのだ、と。What she liked was simply life. ‘That’s what I do it for,’ speaking aloud, to life.<sup>(9)</sup>そして、Peter が What’s the sense of your parties? とした場合、彼女の言えることはつぎのことにつきるのだった、They’re an offering.<sup>(10)</sup> 捧げものである、と。漠然とした言い方ではあるが、彼女は、重ねて言う。And it was an offering; to combine, to create.<sup>(11)</sup> 人々を集めることさえできれば、それは何かを創造することなのだ、と、そしてそれは彼女の天分であったのだった。また、彼女は自分を次のように考える。That was herself when some effort, some call on her to be her self, drew the parts together, she alone knew how different, how incompatible and composed so for the world only into one centre, one diamond, one woman who sat in her drawing-room and made a meeting-point, a radiancy no doubt in some dull lives, a refuge for the lonely to come to.<sup>(12)</sup> それはまるで海岸で光を示す灯台のような存在である。けっしてうぬぼれているわけではない。自分には多くの欠点があるが、できるかぎりよき自分であろうと考える。パーティにおける自分はそんな役割を果たすことができる、それは天から与えられた自分の才能なのだ、と彼女は考えるのだった。

この小説には第一次大戦に應召し、シェル・ショックという戦争の後遺症に苦しむ Septimus Warren Smith という青年が登場する。Septimus と Clarissa は生涯出会うことはないが、お互いの分身として描かれていく。そして小説はその日の夜に開かれるパーティに向かって進行していく。

ついにパーティが始まる。Clarissa は階段の上に立ち、次々と来る招待客を迎えながら、自分はとにかくこのことを起こした張本人なのだ、と感じつつ、自分が自分自身ではない何かになっていると言う感じを持つ。自分はわが家の階段のてっぺんに打ち込まれた一本の杭だと感じるのだ。Every time she gave a party she had this feeling of being something not herself, and that every one was unreal in one way; much more real in another. It was, she thought, partly their clothes, partly being taken out of their ordinary ways, partly

the background.<sup>(13)</sup> また他者に対して普段であれば言えないようなことも、パーティという状況の中では口にすることができ、普段よりずっと深入りする事ができると彼女は感じる。他者との関係が不思議な実在感を伴って感じられ、より近しく密なものと感じられた。曖昧ではあるが、この辺りに Woolf のパーティ意識を探る鍵があるのかも知れない。彼女がパーティ意識という言葉を書き記したのは1925年 *Mrs Dalloway* が出版されたその年であったのだ。また Woolf がパーティ意識と並べて取り上げていた衣服意識 the frock consciousness についても、先ほどの引用の中にあるように、partly their clothes と述べられており、また、2、においての「過去のスケッチ」よりの引用の言葉の中にも、いつもと全く違うものを着ていることの違和感、そこから生まれてくる非現実性について言及している。

そしてこのパーティで Clarissa は、医者ブラッドショー夫妻によって Septimus の死を告げられる。鋭敏な感受性を持ち、過ぎ去っていく時間の中に「生」を見つめて生きる Clarissa は「死」に怯え続けてきた。彼女は自分が作り上げたパーティの場に「死」が入ってきたことに衝撃を受ける。Clarissa は Septimus の死を自分の中で追体験する。彼女はその青年が自分に似ているように感じる。彼の自殺によって自分が死から逃れたと感じる一方で、彼女が怖れ意識する死、それは「無感動」と置き換えてもよいのだが、そうしたものによって日々の生活の中で汚れ、曇らされ、腐らされていくことから、その青年は身を守ったのだと感じ安堵する。

朝の10時から夜半近くまでのほぼ12時間を描くこの作品は、現在の流れ行く時間の中に過去の時間も、また未来の時間をも含ませることによって時間の拡充を果たし、設定された二つのプロットは、最後に用意されたパーティによって一つに結びあわされる。ここに構成の見事さを感じるとともに、Woolf のパーティへのこだわりをも見てとれるのである。

Woolf は確かにパーティというものに興味を抱き続けてきた。そのことは、夫 Leonard の言葉によっても確認することが出来る。Leonard はその自伝において次のように書いている。「パーティという考えに彼女はいつも興奮した。実際においても、パーティ自体の精神的、肉体的興奮、精神と肉体の体温の上昇、騒ぎの渦と泉に対してきわめて敏感であった<sup>(14)</sup>。」

こうした Leonard の観察のように Woolf はパーティにおける他者との関わりの中での精神的肉体的高揚を意識した。この Woolf が意識したパーティというものが、かなり形を変えて、*The Waves* に現れているように思える。次に *The Waves* におけるパーティを考察する。

#### 4 The Waves を通して

*The Waves* は Woolf が1931年新しい小説形式の模索の果てに完成した作品である。この作品は全体が九つのセクションに分けられており、それぞれが、その序曲とも言うべきイタリック体で書かれた風景描写と、6人の登場人物の独白からなる部分とで構成されている。

第1セクション独白部の冒頭は海辺の家の庭で遊ぶ、2においてすでに紹介した幼い6人の独白で始まる。まずは Bernard の言葉、I see a ring hanging above me. It quivers and hangs in a loop of light.<sup>(15)</sup> の言葉の中に見られる ring, loop という語は彼にとって大きな意味を持つようである。

全9セクションにおいて、彼ら6人がそれぞれの持つ個に目覚めていく過程、単なる個から自我を持った人間への成長への過程、そして年老いていく中で個別的アイデンティティを失い一つの生の中に統合されていく過程が描かれる。

こうした彼らの人生の道程において、登場人物6人が一堂に集まる場面が2度描かれる。第一回目は第4セクション、6人が25歳前後とされるこの場面ではインドに旅立つ6人の共通の友人 Percival のための送別の集まりがとあるレストランで開かれる。彼らは食事をし談笑し文字通りのパーティの場面を現出させる。これは、夫 Leonard のいう、他者との関わりあいの中で精神的肉体的高揚を意識する Woolf によって設定されたのであった。何等かの共通の感情に動かされ、ともにひとつのものを作るために彼らはやって来たのだった。But here and now we are together, we have come together, at a particular time, to this particular spot. We are drawn into this communion by some deep, some common emotion. Shall we call it, conveniently, 'love'?... We have come together to make one thing.<sup>(16)</sup> レストランのテーブルに座る6人の血潮は一つに結ばれる。太陽は頂にさしかかり、6人のエネルギーはもっとも高く燃え上がる。彼らはここでその融合の時を過ごし、それぞれの人生へと旅立っていった。

第二の集まりは第8セクション、それはすでに6人が老いへと向かうときである。テムズ川沿いに建つ歴史的建造物である Hampton Court の庭園で彼らの再会は行われる。時間の流れとは無関係のように堂々と建つ Hampton 宮殿を背景に、時間の中に人生を過ごした初老の6人が描かれる。We became six people at a table in Hampton Court. We rose and walked together down the avenue.<sup>(17)</sup> 6人は手を取り合って暗くなった並木道を歩く。And we ourselves, walking six abreast, what do we oppose, with this random flicker of light in us that we call brain and feeling, how can we do battle against this flood; what has permanence?<sup>(18)</sup> Bernard の独白のままに6人は時間という激流に流されていく。だがしかし、ここで Woolf は、この瞬間の中に確かに持続するものがあるとする。6人が一つとなって作り上げたものの中に彼らは永遠を見るのである。But we against the brick, against the branches, we six, out of how many million millions, for one moment out of what measure less abundance of past time and time to come, burnt there triumphant. The moment was all; the moment was enough.<sup>(19)</sup> *The Waves* における Woolf のもう一人の分身 Bernard の言葉である。

*The Waves* におけるこれら二つの場面は、幼い時から ring, loop という言葉に固執して

きた Bernard のグループ全体の一体感と他者との合一への異様なほどのあこがれの実現であり、Woolf が Bernard に託した思いではなかったか。

ついでながら、*The Waves* における Percival のモデルは若くして死んだ Woolf の兄 Thoby である。この兄 Thoby がケンブリッジの友人たちと始めた木曜会を母体とするブルームズベリー・グループは、兄の死後、姉 Vanessa と Virginia を中心として続けられた。*The Waves* は、このブルームズベリー・グループへの讃歌でもあるといわれている<sup>(20)</sup>。このブルームズベリー・グループもまた、形こそ変わるが、Woolf の中に育ち続けたパーティ意識に添うものであったのではないだろうか。

## 5 To the Lighthouse を通して

こうした Woolf の視点は、彼女の他の作品にも描かれる。*To the Lighthouse* は *The Waves* に先だって1927年に出版された作品である。全体が3部に分けられており、第一部と第三部はそれぞれに夏の別荘におけるラムジイ家の一日が、第二部はその両者の間にある十年間自然の移り変わりの中に描かれており、Woolf の時間へのこだわりがここにも表されているようだ。この作品は Woolf が自分の父母を描くという意図のもとに書かれたものであり、この作品を書くことで Woolf は母へのオブセッションがなくなったと書いている<sup>(21)</sup>。

Woolf が自分自身の母をモデルとした Mrs Ramsay は、8人の子供（即ち夫の連れ子1人、自分の連れ子3人、現在の夫との間に出来た4人の子供）の面倒を見、逗留客6、7人をもてなすなど、夏の別荘での大家族を乏しい家計でやりくりする家庭の主婦である。夫 Mr Ramsay は若い頃輝かしい業績をあげた哲学者であるが、今は気むずかしく、ただ妻に依存して生きる男である。そうした夫 Mr Ramsay を全面的に受け入れ、傷つきやすい夫を慰める優しい妻である Mrs Ramsay は、知的で内面的な深さをも持ち合わせながら、時に俗っぽく、保守的な主婦感覚をも見せる。こうした Mrs Ramsay の直感に生きる健全な現実感と、夫 Mr Ramsay の哲学者としての客観性を重んじる態度とが対立しつつ協調し作品の中に流れていく。一見てんでんばらばらに生きるこの別荘の住人たち（8人の子供とその両親、そして常に逗留している数多くの客たち）を、一堂に集め晚餐を供するのが Mrs Ramsay である。三日前から準備をしたビーフシチューで客たちをもてなしながら、まとまりにくいテーブルを一つに統一していく彼女は、この今の瞬間は永遠に残ると感じるのである。この場面はこの小説において、最も重要な場面であるのかもしれない。

...like a flag floated in an element of joy which filled every nerve of her body fully and sweetly, not noisily, solemnly rather, for it arose, she thought, looking at them all eating there, from husband and children and friends; all of which rising in this

profound stillness seemed now for special reason to stay there like a smoke, like a fume rising upwards, holding them safe together. Nothing need be said; nothing could be said. There it was, all round them.... Of such moments, she thought, the thing is made that remains for ever after. This would remain.<sup>(22)</sup>

Mrs Ramsay の言葉の中に Woolf の思いが込められているように思われる。一つの場に集う人々の間から立ちのぼっていく喜びの気、それはまるで香煙のようにたちこめて人々を包み込んでいくのだった。

第2部「時は過ぎゆく」ではラムジー家の十年間、自然の風景描写とともに描かれていく。Mrs Ramsay がまもなく亡くなったこと、長女の Prue がお産で死に、また長男 Andrew が戦死することが語られる。これはまた Woolf の母や姉の死そのものでもあった。次々とかけがえのない人々を失う中で、Woolf は永遠に残る瞬間を模索したにちがいない。

Woolf の作品はそのほとんどが時間を中心テーマとしているようだ。時間の中で生き、死んでいく人間というもの、しかしその限られた生の中にあるもの、それはただ移りゆく時間とともに滅びさせるわけにはいかないものであったのだ。Woolf はそうした永遠に残るべき瞬間は人と人との出会いの場に存在すると考えたに違いない。

## 6 The Years を通して

この作品は、*The Waves* の6年後に出版された。Woolf はそれまでの作品においてすでに新しい小説技法を展開させて来たが、*The Waves* において最も新しい実験小説とまでいえるものを完成させたのであった。この *The Waves* の後1937年に発表した *The Years* は、一見伝統的な小説技法に立ち返って書かれたように見える。しかし、1880、1891、1907、などと年代のタイトルのもとに13の章に分けられたこの作品は、各章の冒頭に季節や気候を含む自然描写を主としたプロローグが設定されており、また登場人物の独白によって語られる部分も多いため、*The Waves* との共通点を多く見出すことが出来る。Woolf は単に事実の小説へと戻ったのではなく、あくまでそれまでのヴィジョンの世界と事実の世界を結合させようと試みたように思われる。この13に分けられたそれぞれの章には、ある一日が設定されており、作品全体を一日という単位に設定した *Mrs Dalloway* や、ある一日を描いた2つの章を *Time Passes* と題された短い章でつないだ *To the Lighthouse* ともつながるものを持つようだ。*Mrs Dalloway* が作者によってある時期呼ばれた *The Hours* という題名も、この *The Years* という題名と似通うものを持っている。そしてまた、この *The Years* の最終章 *Present Day* では一族の集まるパーティが描かれて、パーティで締めくくられた *Mrs Dalloway* との共通点を持つ。

Pargiter という一家の年代記ともいえるようなこの小説での、最後の章では、この家の長女 Eleanor はすでに70歳を過ぎているが、今も活動的で好奇心に溢れ、若々しい。未婚のままに生きた Eleanor ではあるが、兄弟姉妹、その子供たち孫たち、そして友人たちの中にあって、生き生きと振る舞うその姿は印象的である。Woolf は1932年の1月、50歳の誕生日を前に、My word, what a heaving *The Waves* was, that I still feel the strain. Can we count on another 20 years?<sup>(23)</sup>と日記に書いている。あと20年、作家として生きていけるだろうか。作家としてのみずみずしい感受性を持ち続けることができるのか。そんな不安を胸に、Woolf は70歳の Eleanor を描く。妹 Delia の催すパーティで Eleanor はふとうたた寝をするのだが、その眠りから目覚めた彼女は異常なほどの幸福感を味わう。Eleanor は思う。There must be another life, here and now, she repeated. This is too short, too broken. We know nothing even about ourselves. We're only just beginning, she thought, to understand, here and there.<sup>(24)</sup>彼女は現在の瞬間を通して過去と未来の完全な理解に達したいと願ったのだ。そしてまた次のように感じる。She felt that she wanted to enclose the present moment, to make it stay; to fill it fuller and fuller, with the past, the present and the future, until it shone, whole, bright, deep with understanding.<sup>(25)</sup>

老いてなお18の娘のようにみずみずしい Eleanor もまた最終章に設定されたパーティでこのような啓示を受ける。死、それは老齢による感受性の喪失ともいえるものであったが、その感受性の喪失を怖れ続けた Clarissa Dalloway と、ここに描かれる Eleanor との対比は興味深い。この今という時間の中に過去も未来も含ませて、満ち足りてきらきりと輝かせたい、そんな思いを Woolf は Eleanor にも託したのではなかったか。Eleanor は Woolf の思い描く年を重ねた自分の理想の姿、言うならば Eleanor は Woolf 自身であったのだ<sup>(26)</sup>。

そして、この *The Years* の最終章の最後の文が The sun had risen.という言葉で始まることを思うとき、*The waves* との対比を思い興味深い。The waves broke on the shore. というイタリック体の一行で終わる *The Waves* の最終行は、この作品の postlude として世界の終焉、そして登場人物6人の生の終わりを象徴しているものと思われる。それは勿論この宇宙における終わる事なき生と死のサイクルをも象徴しているのではあるが。一方 The sun had risen, and the sky above the house wore an air of extraordinary beauty, simplicity and peace. という言葉で、この50年にわたる saga ともいべき小説は終わっていく。時間が重ねられ、人々は去っていくが、この最後の文章はそれを肯定し、またなにがしかの希望を与えてくれるように思われてならない。Woolf はこの小説を4年半の呻吟の果てに生み出したのであるが、夫 Leonard の評価はあまり芳しいものではなかったようだ。しかし、夜の闇ではなく、朝の光の中にこの小説が終わっていくところに Woolf は意味を見いだしたのではないだろうか、と思うのである。

## 7 おわりに

ここまで Woolf のいくつかの作品におけるパーティのあり方を見てきた。それらは Woolf が若い日経験したパーティとは大きく変化してきているように思われる。 *To the Lighthouse* におけるディナーパーティ、 *The Waves* における一堂再会、 *The Years* における一族再会ともいえる和やかなパーティ、と見てくるとき、Woolf 自身の持つパーティ意識ともいうべきものは、大きく変貌してきたように思うのである。それは Quentin Bell が指摘したような若い日の Woolf が持っていたやや卑小ともいうべきパーティ意識とは異なったものであったにちがいない。他者との出会いの中での精神的な高揚や、その中から生み出される何か不可思議なるものへの彼女の関心は変わることはなかったろうが、しかしそれは上流社会の社交界における華やかさへの憧れとは異なったものとなっていくのだ。それは Mrs Ramsay のいう「未来永劫に残るもの」をつくる場であり、 *The Waves* でひたすら ring、loop に執着した Bernard が求め続けた他者との一体感の生まれ出る場であったろう。そしてまた今生きるこの瞬間に強く執着する Clarissa や Eleanor にとって、みずみずしい感受性を保ち続けるための必要不可欠の場であったのかもしれないと思うのである。

以上、Virginia Woolf のパーティ意識について考察した。

### 〔注〕

- (1) V. Woolf, *The Waves*. (Shakespeare Head Press Edition, 1993) p.p. 66-67.
- (2) V. Woolf, *Moment of Being*. (Grafton Books, London, 1989) p. 165.
- (3) Ibid. p. 170.
- (4) Ibid. p. 170.
- (5) Ibid. p. 170.
- (6) クウェンティン・ベル 『ヴァージニア・ウルフ伝』 1 (黒沢茂訳) (みすず書房1976) p. 127.
- (7) 神谷美恵子 『ヴァージニア・ウルフ研究』 (みすず書房 1981) p. 200.
- (8) V. Woolf, *A Writer's Diary*. (The Hogarth Press, London, 1954) p. 75.
- (9) V. Woolf, *Mrs Dalloway*. (Penguin Books, 1992) p. 133.
- (10) Ibid. p. 133.
- (11) Ibid. p. 133.
- (12) Ibid. p. 40.
- (13) Ibid. p. 187.
- (14) 神谷 美恵子 『ヴァージニア・ウルフ研究』 p.205.
- (15) V. Woolf, *The Waves*. p.5.
- (16) Ibid. p.p. 79-80.
- (17) Ibid. p. 180.

- (18) Ibid. p. 147.
- (19) Ibid. p. 180.
- (20) L.Gordon, *Virginia Woolf: A Writer's Life*. (Oxford paperbacks, 1988) p. 212.
- (21) 宮田恭子『ウルフの部屋』(みすず書房 1992) p. 57.
- (22) V. Woolf, *To the Lighthouse*. (Oxford Paperbacks, 1992) p.p. 141-142.
- (23) V. Woolf, *A Writer's Diary*. p. 178 Wednesday, January 13th, 1932.
- (24) V. Woolf, *The Years*. (Grafton, London, 1977) p. 421.
- (25) Ibid. p.p. 421-422.
- (26) V. Woolf, *A Writer's Diary*. p. 195 Saturday, March 25th 1933.

【参考文献】

神谷 美恵子、1981、『ヴァージニア・ウルフ研究』、みすず書房

クウェンティン・ベル、1976、『ヴァージニア・ウルフ伝』 I、みすず書房

L. Gordon, 1988, *Virginia Woolf: A Writer's Life*, Oxford paperbacks.

宮田 恭子、1992、『ウルフの部屋』、みすず書房

James Naremore, 1973, *The World Without a Self*, New Haven and London, Yale University Press.

Edited By Joanne Trautmann Banks, 1989, *Congenial Spirits, The Selected Letters of Virginia Woolf*, Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.

Hermione Lee, 1996, *Virginia Woolf*, Vintage.

石井 康一、1983、『ヴァージニア・ウルフの世界』、南雲堂.

吉田 良夫、1991、『ヴァージニア・ウルフ論』、葦書房.

(みずなみ まこと 文学研究科英米文学専攻博士後期課程満期退学)

(指導：古我 正和 教授)

2008年9月29日受理